

65・心の琴線に触れ何か変わる？ (2008.6)

日中友好もいろいろな形で推進しているようであるが、何が何でも自衛隊機が中国の空を飛ぶことに絶対反対！とのネット書き込みの嵐のためか、実現しなかったことは衆知です。

自衛隊機を使うかどうかでもめている間にテント支援が大分遅れたようだが、被災者の緊急事態を第一に考える時、今そこにある大危機を救助しなければならぬ時に、双方の歴史や政治がからみ動けないで、支援が遅れることは実に残念です。

仕事で初めて北京に行った十五年ほど前、大きなホテルに二週間滞在したが名前は「中日友好飯店」でした。多分、角栄さんと周恩来さんが友好の調印「1972年」をした後に出来たホテルだと思うが、あれから三十五年も経ってまだ真の友好が出来ないことを思うと、戦争は良くないと改めて思います。

四川大地震での日本の緊急救助隊が中国で絶賛されました、その後行った医療チームも負傷者に対する対応や医療活動で中国の人たちの心を打ったようです。

整列して犠牲者に黙とうをささげている写真には私もジーンとしましたが、失われた命もおろそかにせず敬意を払う日本救助隊の姿は、中国の人たちの心を揺さぶったようです。

「ありがとう日本」「感動した！」などの書き込みがネットを駆けめぐったことを報道で知りましたが、反日の温床である中国ネット社会でこのような多くの書き込みがあったことは、真の友好にまた少し又近づいたのかもしれないかもしれません。でも、まだまだ危なっかしい！

昨年末の日本における外国人登録数は中国が韓国、朝鮮を抜き最多（約六十万七千人）になったと今朝の新聞で知ったが、人的にも経済的にも切っても切れない隣国同士、政治的なものももっと改善されれば・・・と期待してしまうのが今です。

66・友好を阻むちゅう公 (2008.6)

日中友好ではないが雀との友好実現を目指して四ヶ月が経ちました。大分前から四メートル離れたベンチに座っていても枝からすぐに降りてくるようになり、先日は一メートル離れたところに後ろ向きに座っていると二、三羽が降りてきてコシヒカリを掴まむようになった。しかし、向きを変えて座るといつまで経っても降りて来ないことを見ると、真の友好は程遠い。

先日、コシヒカリをいつものように撒き、暫くして窓越しにふと見ると二羽が並んで掴まんでいる平和な姿がありました。約五秒後に雀の動きが少し違う

ことに気が付いた！ ん……とばかりに良く見ると雀ではなく、何とねずみのちゅう公、二羽ではなく二匹。すぐに外に出て追い払ったが、まさかちゅう公までも米を掴まんでいたとは全く知らなかったので大ショックを受けた。妻には内緒にすることにした。

昨日、庭に立っていると狭い庭の草花が風も無いのに揺れ動いており、その揺れが何故か移動している。思わずドラマ「ROST」の一場面が頭に浮かんだ。なに！ あのドラマを観ていた時も全く同じであった。暫くして遂に見えた！ 鳩ぐらいあるちゅう公である。この前の二匹よりは相当大きいから保護者かもしれない。さすがの私もビックリ仰天……妻にありのままを報告すると妻の顔の色が変わり、環境衛生の話や鳥インフルエンザの話の長々と聞く羽目になってしまった。

神奈川県役所の環境衛生係に電話しアドバイスを請うことにした。

「むかし田舎で子どもの頃、ねずみ駆除のだんごを作った覚えがありますが、今でも買える物ですか？ 今の薬は昔ほど強力ではなりませんが、買うことは出来ますよ。でも、ねずみが何処かで死んでそのままになっていると衛生上良くないですね。もしご希望ならばネズミ捕りの籠を二個までならお貸ししますが」という訳で早速二籠借用した。その結果は後日また報告いたします。

ちゅう公の運命はどうなるか分からないが、私の雀友好チャレンジはこの場に及んでまさかの事態になり中断、何かやり方を改善・変更しないと妻の許可が下りそうもない。何ごとも友好を築くことはそう簡単ではなく、スムーズにはいかないものようです。

67・ガンバレ日本！（2008.6）

女子バレーボールが北京オリンピックに出ることになった。連日の大活躍に毎日のようにテレビは高視聴率だったようです。これを読んで頂いている多くの皆さんも多分テレビの前で声援を送っていたのではないのでしょうか？ 監督、選手に心からおめでとう、ありがとうございますと思います。

現在、男子バレーボールが開催中で今日はオーストラリア戦です。それにしても初戦のイタリア戦がまだ忘れられません！ 二勝一敗で迎えた第四セット、二四対一七、応援席も戦っている選手も控えベンチもお祭騒ぎ、国民の誰もが百二十パーセント勝利を確信し、男子も北京に行けそうだと思っただけです。しかし、最後の一本がどうしても取れない。たったの一本！ でも絶対に大丈夫……と樂觀している内に何と逆転負け、まさかの事が起きてしまった！

思わず2004年アテネオリンピックの柔道を思い出した。（2004年所感）五十二キロ級の横沢選手が絶体絶命の状態からキューバの世界チャンピオンをきれいな一本勝ちで投げ下ろした。投げた後残り時間0秒というあの場面である。あの時は歓喜であった。

世界中の人が勝負とはこうゆうものか、負けていても絶対諦めない、勝っていても絶対油断しない、と教えられた場面であったが、今回のイタリア戦は実に不愉快で後味の悪い結末となった。

でも過ぎたことは仕方がない、その後の日本は韓国、タイと快勝しているが何としても勝ち進んで女子と一緒に北京に行つて欲しいと思う。ガンバレ日本！ この所感をサーバーにアップする前にオーストラリア戦になってしまった。激戦の連続、そして勝った3対0！ ほんとに激戦だった。選手、監督の皆さんありがとう！ あの終始クールな植田監督が三セット終わった直後に床の上にならずくまり、しばし立てなかった。

何と美しい姿！ インタビューでは目を真っ赤にしていたが男泣きを隠せなかったのだと思う。勝負とはこうゆうものだと言えられた。

68・「明日もまた生きていこう」を読んで (2008.9)

必ず書こうと思いつつ、いつい今になってしまった。

北京を目指す全日本女子バレーボールがオリンピック出場の特典を手にした試合直後、木村選手にマイクが向けられた。「親友の分までもどうしても北京に行きたいと言う思いが……横山選手にいい報告ができますね。天国の横山さんに何と伝えましょう」

一瞬に笑顔が消え、うつむき絶句、涙。そしてふりしぼる様に、「やっぱり……どつかで見えてくれていると思うので、北京では結果を出せるようにがんばります」

一体何があったのだろうか？ 横山選手のことを知りたくなった。2004年のワールドグランプリに高校二年生で全日本に抜擢された横山と木村。

北京のコートと一緒に立つことを夢見ていた二人だったが、2005年三月十八才の若さで癌の宣告を受けた横山は、絶望の淵から諦めることなく治療に専念した。しかし、北京のコートに立つ夢が時を経て、せめてスタンドから北京のコートを見たい夢が変わってしまった。

木村はオリンピック出場最終予選を前にした合宿先から、友美佳のように決して諦めないで貴方の分までがんばるから！ と手紙を送った。しかし、この二日後横山友美佳は二十一才の若さでこの世を去った。彼女の思いをどうしても知りたくて、療養中に執筆したという本の発売日に書店に駆けつけた。本には感動と教えられることがいっぱい詰まっていた。

著者、横山友美佳さんの本より、まさか自分がそんな病気にかかっているなんて信じられなかった。怒りと悔しさが交互にこみ上げた。夢や目標はみな白紙に戻り、目の前には生か死の選択肢しかなかった。色鮮やかだった世の中の全ての景色が白黒にしか映らなくなった。私が楽しみにしていた十八才、青春真っ盛りだと信じていた十八才。この年に受け取った闘病という届け物は、そのイメージからはあまりにもほど遠かった。この病気になって初めて分かった。健康でいることは当たり前なんかじゃない。健康で生きることとはどれだけ難しく、どれだけ素晴らしいことなのか。普通にご飯が食べられるようになって

たころ、私は無上の幸せを感じた。気持ち悪くないってこんなに幸せなこと、ご飯をおいしく食べられるってこんなに幸せなこと。こんなことは当たり前のようにだけど、決して当たり前じゃないんだ。生きている限り、毎日新しくたくさんを知ることができる。それを積み重ねれば人生がどんどん豊かになるし、充実していくと思う。それこそが生きがいなのかもしれない。病気になっていちばん考えたのは、やはり命の尊さです。

どんなにがんばっても、どんなに栄光をつかんでも、命を守れなければ、全て付属品で終わってしまいます。今の世の中、自ら命を捨てる事件がたくさん起きていますが、それを聞くと強い怒りを感じます。

私がこんなに命を守りたくて、健康を手に入れるために、こんなに治療を続けているのに、命を捨てるくらいなら私にください！ 私はそう叫ばずにはいられません。

現役を退き毎日を淡々と過しているこの頃、新聞を読みTVドラマを観て、飲食を愉しみ農道を散歩する日常生活。これ等は決して当たり前なことではないのだ！ ただ人は健康だと気付かないだけなのだ。と言うメッセージを痛いほど感じました。

生きたいと願っても生きられなかった横山友美佳さんのご冥福を心からお祈りします。

69・「ちゅう公プロジェクト」その後 (2008.9)

区役所二階、いちばん奥の福祉保健センター生活衛生課、環境衛生係長がゆつたりと立ち上がり笑顔で迎えてくれた。

「お話を聞くとそれは畑ねずみかもしれませんね。もしご希望でしたら係員が出て環境調査をしましょうか？ 何と親切な対応！ と少しビックリ。昨今、社会保険庁の問題で行政不信が広がっているその影響も多少はあるのだろうか？

「ネズミ捕りに仕掛ける餌は人が食べても美味しいものですよ。例えば、焼き鳥の皮、蒲焼の皮、焼き魚の皮、焼肉、トンカツの脂身などですね」

貴重なアドバイスをもらい早速作戦を実行した。まずは冷蔵庫を開けてすぐ目についた「ちくわ」をつけ二日待ったが成果なし。うーん、これは人が食べなくてもイマイチかもしれない。鳥の煮込み、焼肉にグレードアップし三日待ったが駄目だ。でも、籠の外に誘導のため置いた肉が無くなっているのを見ると、夜半に忍び寄っていることは間違いない。敵は思考力もあり、警戒心が強いようだ。この点は雀プロジェクトと似ている。

一週間経ったが獲物がなく自信喪失さみ、区役所に相談しようかと思っただが、その前に子どもの頃、家に積んである米俵に鼠が襲来し頭を抱え口説いていた親父のことを思い出した。『そうだ、ちゅう公はライスが好きなんだ』と気が付いた。自信を取り戻し雀との友好に使った古いコシヒカリを檻の中に撒き一晚

経過。朝、怖いものを見るように覗いてみると「遂にやったー」作戦変更が見事に的中した。

その二日後、別の籠にも成果有。係長のアドバイスも尤もで理にかなっているが、私のケースでは昔からの素朴な原理、基本を実施したことで成果があったという結論を得て、この小プロジェクトを終わることにした。

追伸、それにしてもちゆう公の顔はなかなか可愛いもので、処刑するのに心が痛みました。何処かの野原で解放すべきだったかも……ねずみ年なのに。